「カルミナ・ブラーナ」について（1）

丑　田　弘　忍

ドイツ文学史上には周知の如く二度にわたる隆盛期があった。Goethe, Schiller などの輩出した18世紀と，これに溯ること600年の 12〜3 世紀である。この中世社会は当時の文化語であると共に国際語ででもある中世ラテン語と，ドイツ語，フランス語等の俗語の二重言語世界であった。教養ある者は常にこの二つの言語を不自由なく使用することが出来たであろう。この時代は文学の世界においても中世ラテン語文学と俗語文学の両方にとって黄金の時代であった。中世ラテン語の作品が俗語の作品のさきがけとなったり，あるいは平行して互いに影響しあい，それぞれ言語的，文学的に彫琢された時代であった。畢竟この時代は宮廷文学の傑作が次々と生れた時代であったけれども，Carmina Burana『カルミナ・ブラーナ』（ボイレン歌謡集）とか，Carmina Cantabrigiensia（ケンブリッジ歌謡集）等のユニークなジャンルである Vaganten（放浪詩人の意，ラテン語 vagare = 彷徨する，さすらう）の制作した数々の抒情詩も等閑に付されてはならない。これらの詩がドイツ中世最大の抒情詩人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ（Walther von der Vogelweide 1170/75-1230）等に与えた影響も大きいとされている。

Vaganten と Vagantendichtung

中世において，Vaganten に対する呼び名は種々あったと推定されるが，特に親しまれていた呼び名は，Karl Langosch [1] によれば，clerici [2] vagantes あるいは vagi であった。他方旧来 Vaganten はしばしば goliardi [3] とも呼ばわれてきたが，Otto Schumann [4] は区別して言っている，「Walther von Châtillon (†1201) や宮廷詩人 Heinrich III

を Vaganten と呼んでも，goliardi とは呼ばわれないであろう。彼らは波瀾に富んだ遍歴を行なっているが，酒と賭博の歌は彼らの詩には見いだせない。この意味で Vagant とは，今日言う，Freie Schriftsteller であろう」しかしながら当時の抒情詩人は概ね作詩作曲の出来る所謂吟遊詩人 (Fahrende Sänger) で，一箇所に留まらず，宮廷から宮廷へ，都市から都市へと遍歴しパトロンから喜捨を受けるのを常としていた。O. Schumann はこれら吟遊詩人を総て Vaganten とみなし，これに加えて酒と賭博の歌を歌う詩人を goliardi とみなしているように思われるが，Vaganten は無論 Fahrende Sänger の一部ではあるが，イコールではなく，Vaganten には特有の意味があり，その点 O. Schumann の区別には無理があり，Vaganten と goliardi の厳密なる区別は不可能と思われ，同一視して妥当であろう。

では一体 Vaganten の特質とは何であろうか。中世において clerici vagantes あるいは vagi と呼ばわれていたように，本質的には放浪する聖職者，学生である。もちろん単なる放浪者，あるいは当時の流行であった遍歴職人と同一視されてはならない。彼らは神学や哲学の充分な教養を身につけていた学生僧である。Vaganten の発生はヨーロッパにおける大学の勃興と共に始まり，そして大学の数が増すと共に彼らの数も増した。十二世紀ルネッサンスを唱えた有名な中世史家 C. H. ハスキンズが彼らの活躍した時代をほぼ1125年から1230年の間とし，この時代を the great age of Goliardic poetry[5] と呼んでいるように，中世文化の最も昂揚した時代に彼らの活躍も顕著となった。彼らには，教授の名声をしたって，パリ，サレルノ，ボローニヤへと遍歴した学生たち，当時は教会の重要職につく者は，王家や貴族の出身者に限られていたので，学業を終えながらも農民出身や身分の低い家柄の為，能力がありながら，どんなに努力しても自分の望んだ教会職につくことが出来なく身を持ち崩した学生僧，能力に合わず学業を中途で放棄し，自由奔放な放浪生活に身を委ねた元学生がこれに含まれよう。彼らは一定の職業も住居も持たず。教会や都市や社会の掟を犯したり，酒とばくちで時を過ごしたり，市民とのいさか

いをも行う反社会的行為や，破廉恥な行為もまれではなかったろう。また食物や衣服をもしばしば乞わねばならなかったであろう。いわば彼らは中世社会のアウトサイダーである。

有名な学生の歌 gaudeamus igitur, juvenes dum sumus（それだから，若いうちに楽しもう）に典型的に顕示されている如く，キリスト教の厳格な教義に抗して，彼らの歌う歌は現世主義的である。彼らは現世における快楽を強い喜びをもって享受した。彼らの歌う歌は，官能的な愛であり，自然に対する強い歓喜，春への憧憬，春の到来の喜び，森と野の夏に対する歓喜，そしてぶどう酒とばくちである。しかしながら彼らは本来聖職者であるので，宗教的な色彩を排除した Vagantendichtung は考えられない。

Szövérffy[6] は Vagantendichtung を概ね次の5つに分類しているが，最も妥当であろう。

① Liebesdichtung
② Natur-und Frühlingsdichtung
③ Satirische Dichtungen und Invektiven
④ Trinklieder
⑤ Tanzlieder

彼ら Vaganten は常に団体 (ordo) で行動し，同族意識を強く保持していた。その歌もミンネザングのように個人的な色彩の濃い Ich-Dichtung とは異なり，本質的に共同体共通の諸感情を描出する Wir-Dichtung である。そのため多くの歌は作者不明である。

彼らは当時の教科書から知識や表現法を汲みとり，詩作上の師は概ね Vergilius や Ovidus であったが，大部分のラテン語詩は古典詩のようにシラブルの長短の韻律を拭い捨て，近代詩のようにライムと強弱のアクセントを使用し，近代詩のさきがけとなった点も注目に値しよう。

注

(1) Karl Langosch: Deutsche Literatur des lateinischen Mittelalters. S. 126.

(2) clericus は中世に作られたラテン語である。J. F. Niermeyer : Mediae Latinitatis Lexicon Minus によれば clericus の意味は次の7種に分類されている。① clerc. ② clerc n'ayant reçu que les ordres inférieurs ③ moine ④ chanoine ⑤ clerc en apprentissage chez un prêtre, souvent changé de l'office et de l'enseignement. ⑥ savant ⑦ scribe

(3) goliardus も中世に作られたラテン語である。原義は不明。古典ラテン語 gula（のど）からとも，聖書中の人物ゴリアテ Goliath（サムエル記上第十七章に登場するペリシテ人の代表戦士で巨人。ダヴィデの投げた石で額を打たれて死ぬ）

(4) Otto Schumann : Kommentar zu Carmina Burana S. 83.

(5) C. H. Haskins : The Twelfth Century Renaissance, p. 177.

(6) Josef Szövérffy : Weltliche Dichtungen des lateinischen Mittelalters I, S. 60.

Carmina Burana

Carmina Burana は Carmina Cantabrigiensia と同様，これら Vaganten の制作した中世ラテン語と中世高地ドイツ語による一大アンソロジーである。中世以来眠りつづけていた写本（所謂B写本）は1803年ドイツのバイエルン州の僧院ベネディクトボイレンで，この僧院を国有化する際に，Christoph von Aretin 男爵によって発見され，現在はミュンヒェン州立図書館に保管されている。刊本は1847年，A. Schmeller によって初めて「Carmina Burana」の名で発刊され。さらに1901年 W. Meyer によって断片が発刊された。その後1930年来 A. Hilka と O. Schumann によって決定版が発表された。

Carmina Burana の写本は112葉と1901年 W. Meyer によって「Fragmenta Burana」として発表された7葉から成り立っている。これにおそらく同一人物によって画かれたと思われる8つの美しいミニアチュアが加えられている。Carmina Burana は1300年頃高僧の委託を受けた3人の書写生によって筆記されたと推定されている。一般に Vagantendichtung はその特質上流動的で，概ねその場で筆記されることなく，口述で伝播されたが故に，作者はほとんど不明であり，成立時期と制作場所を

決定することは多くの場合不可能である。その為 Carmina Burana の場合にもほとんど作者不明であり，制作場所は南ドイツ，スイスの周辺，制作時期は12〜3世紀と推定されているにすぎない。

Carmina Burana は今四つのグループに分類することが出来る。

① 教訓詩並びに風刺詩

② 恋歌

③ 酒と賭博の歌

④ 宗教劇

私は Carmina Burana 研究にあたりまず第一に中世高地ドイツ語詩を紹介概観するつもりである。Carmina Burana に限らず一般に Vaganten の作品は中世ラテン語詩が本領である。その中にあってドイツ語詩がどのような意義を有しているかを知る為には，ラテン語詩とドイツ語詩との間にいかなる関係が存しているかを研究することが非常に重要なるが故に，次にラテン語詩とドイツ語詩との比較検討を行ない，最後に Carmina Burana 全体に顕彰されるユニークな世界を解明するつもりである。

テキストは A. Hilka, O. Schumann の決定版 (Carmina Burana, Mit Benutzung der Vorarbeiten Wilhelm Meyers kritisch herausgegeben von Alfons Hilka und Otto Schumann, 3 Bände, Carl Winter, Heidelberg) を使用し，番号はすべてこれに従ってある。

Carmina Burana B 写本の一葉　92r
Bayerische Staatsbibliothek in München (Clm. 4660)

48a

Hórstu, uríunt, den wáhter án der cínne,	5wv. a
wés sin sánch ueriách?	3 v. b
wir múozen uns scháiden nú, líeber mán.	5 v. c
álso schíet din líp nu júngest hínnen,	5wv. a
dó der tách uof brách	3 v. b
unde úns diu náht so flúhtechlíchen trán.	5 v. c
náht git sénfte, wé tuot tách.	4 v. b
owé, hérce líeb, in mách	4 v. b
dín nu uerbérgen níht.	3 v. d
uns nímit diu fréude gár daz gráwe líeht.	5 v. d
stánd úof, ríter!	3 v. x

大事なお方，胸壁の夜警の歌が聞えるでしょう。
何を歌っているんでしょう。
もう別れねばなりませんわ，大事なお方。
ついこないだもあなたは行っておしまいになりましたわ，
朝になって夜がすばやく過ぎ去ってしまった時でした。
夜はやすらぎを，昼は悲しみをもたらします。
ああ，大事なお方，わたしはあなたをもうお隠しすることが出来ません。
暁が喜びをわたしたちから奪い去ってしまいます。
起きて下さい。騎士殿。

この詩はA写本 (die kleine Heidelberger Liederhandschrift) には Nivene の作品として，C写本 (die große Heidelberger Liederhandschrift) には Graue otto von Botenloube の作品として入れられている。無論決定することは我々には不可能である。

この詩はミンネザングの一ジャンルの Tagelied (きぬぎぬの歌) の Frauenstropfe である。お互いに許されぬ恋をしている男女の夜の密会のあとの別れがテーマである。夜が明けた事を知らせる夜警は彼らの味方であり，朝は嫌悪すべきものである。他の Tagelied には夜警のかわり

に，東風，小鳥，角笛等がしばしば用いられている。Tagelied の起源はプロヴァンスの民謡であるといわれている。

112a.

Dív mich síngen túot,	3 v. a
getórste íh si nénnen!	3wv. b
trúrech íst min múot.	3 v. a
owí, vrówe, wénne	3wv. b
wildú mir wésen gv́ot?	3 v. a
ih réche dír mine hénde;	3wv. c
du brénnest míh ane glv́ot!	3 v. a
svóze, die úngenáde wénde!	4wv. c

私に恋の歌を歌わせる
その人の名を思い切って言いたい。
私の心は悲しみで一杯です。
ああ，貴婦人よ，いつになったら
私に親切にしてくれるんですか。
あなたに手を差しのべましょう。
あなたは私を火なくして燃え立たせるのです。
大事なお人，どうかそんなにつれなくしないでください。

ミンネザングは常に楽しみや甘美なものを歌いあげるとはかぎらず，その多くは相容れられない恋の苦しみや歎き (Liebesklage) を歌っている。

113a

„Vváz ist fúr daz sénen gúot, daz wip nah lieben mánne hát?	4+4v. a
wie gérne dáz min hérze erchánde, wán daz íz so bedwúngen stát!“	4+4v. a
álso réit ein vrówe schóne.	4w v. b
„án ein énde ih dés wol chóme,	4w v. b
wán div húote;	2w v. c
sélten sín vergézzen wirt in mínem múote.“	4+2wv. c

「女がお慕いする殿方にいだく切ない思いに何か良いものはないでしょうか？
私はそれを知りたいものです。私の心は恋の苦しみにさいなまれています」
こう美しい貴婦人は言った。
「恋の苦しみは終るでしょう，
見張りさえいなければ。
あの御方の事は決して忘れられません」

C写本には Dietmar von Eist (†1171?) の作として入れられている。これも Libesklage の歌である。

114a.

Der ál der wérlt ein méister sí,	4 v. a
der géb der liében gúoten tách,	4 v. b
von dér ih wól getróstet pín.	4 v. a
si hát mir ál min úngemách	4 v. b
mít ir gúote gár benómen.	4wv. c
unstǽte hát si mír erwért ; íh pin sín an ir genáde chómen.	4+4wv. c

いきとしいけるものの主人である御方が
かのいとしい人に良き日を授けて下さいますように！
あの人は私を慰めてくれました。
親切にもあの人は私から
悲しみを取り去ってくれました。
あの人は私の移り気を防いでくれました。
それで私はあの人の恵みに与り得ました。

貴婦人に心を寄せる騎士の心を歌いあげている。韻律も規則正しく，表現は簡潔で，優れた詩の一つといえよう。

115a.

Édile vrówe mín,	3 v. a

gnáde máne ih dích!　　3 v. b
din wúnnechlícher schín　　3 v. a
víl gar verdérbet mích.　　3 v. b
súoze, erchénne dích!　　3 v. b
din líp der íst mir ze wúnnechlích.　　4 v. b
Refl. Nách im íst mir nót;　　3 v. c
súoze vrówe, gnáde, álde íh pin tót!　　6 v. c

気高き御婦人。
どうかお心を傾けて下さい。
あなたのみめうるわしいお姿は
私を破滅させます。
甘き人，自分をお知りなさい。
あなたはあまりにも私の心をひきつけます。
私はあなたを恋い求めています。
大事な御婦人，愛を，でないと私は死んでしまいます。

これも Liebesklage を歌っている。O. Schumann は gnade, alde ih pin tot を lächerlich な表現としている (Germanisch-Romanische Monatshrift, Bd. 14, S. 428) 即ちあまりにも誇張した表現といえよう。

135a.

Der stárche wínder hát uns uerlán,　　4 v. a
div súmerzít ist schóne getán;　　4 v. a
wált vnde héide síh ih nu án,　　4 v. a
lóup vnde blúomen, chlé wolgetán;　　4 v. a
dauon mág uns fróude nímmer zergán.　　4 v. a

きびしい冬はすぎ去った。
夏の日はすばらしい。
今私は森と野を目にする，
枝葉と花々，美しいクローバを。
喜びは決して消えさらないでしょう。

この 135a から 152a までは自然美を導入した春（夏）と恋を歌う歌であ

る。chle という表現はクローバそれ自体ではなく，野の緑の草木一般の総称である。

136a

Sólde ih nóch den tách gelében,	4 wv. a
dáz ih wúnschen sólde	3 wv. b
náh der, dív mir fróude gében	4 wv. a
mách, ob sí noch wólde!	3 wv. b
min hérze múoz nah ír strében;	4 wv. a
móchtih sí han hólde,	3 wv. b
So wólde ich in wúnne swében,	4 wv. a
swére ih nímmer dólde.	3 wv. b

その人が望めば，
私に喜びを与えてくれる事が出来る，
そんな人を求められる日を
味わうことが出来ればいいんだが。
私の心はあの人を求めてやみません。
あの人を恋人とみなすことができるならば，
私は歓喜の中にただようでしょう。
私は決して苦しみを味わうことはありません。

表現は冗長的でまとまりのない駄作の一つであろう。ミンネザングで次のように同じような表現を使用した二つの詩が見い出される。一つは Heinrich von Sax，もう一つは Ulrich von Liechtenstein (†1274～77) の詩である。

Heinrich von Sax, Schweizer MS XIV, 1, 123ff.

Sold aber ich geleben,
daz diu liebe frouwe mìn
mir fröide wolde geben,
so wold ich in fröiden sìn...
ob diu vil reine...

mich wold enbinden...

及び同詩人

...sô wold ich in wunnen sweben...

Ulrich von Liechtenstein, Frauendienst 110, 21ff.:

...hôchgemüete wolde
vil gerne belîben
bî mir, het ich si holde,
von der ich dol
herzenlîche swære.

多くの一致は全く遇然のものではなくて，O. Schumann (a. a. O. S. 426)の言うように，Carmina Burana の作者が二人の詩人の作から寄せ集めて作ったと推定される。

137a.

Spríngerwír den réigen	3 wv.	a
nú, vrówe mín!	3 v.	b
vróvn uns gégen den méigen!	3 wv.	a
uns chúmet sín schín.	3 v.	b
der wínder der héiden tet sénediv nót;	4 v.	c
dér ist nú zergángen,	3 wv.	a
sí ist wúnnechlích bevángen	4 wv.	a
von blúomen rót.	2 v.	c

さあ輪を作って踊りましょう，
貴婦人よ。
五月を楽しみましょう。
五月の輝きがやって来ました。
冬は恋のうずきを野にもたらしました。
今や冬は去ってしまいました。
野は赤い花々に美しく包まれています。

Senediv not（恋のうづき）はミンネザングにおける常套な表現である。ここでは野の草花に対する憧憬を prosopopöie を用いて表わしてい

るが，あまり成功しているとは思われない。

138a.

In líehter várwe stát der wált,	4 v. a
der vógele schál nu dónet,	3 wv. b
div wúnne ist wórden mánichvált ;	4 v. a
des méien túgende chrónet	3 wv. b
sénide líebe; wér were ált,	4 v. a
da síh div zít so schónet ?	3 wv. b
her méie, iv ísl der brís gezált !	4 v. a
der wínder sí gehónet !	3 wv. b

森は明るく色づいている。
今や鳥はさえずり，
喜びは幾重にもなった。
五月の美しさは恋のうずきを花環で飾る。
こんなに美しい季節に，
誰が老いぼれていようか。
五月殿，おん身に誉が与えられた。
冬はののしられよ！

139a.

Zergángen ísl der wínder chált,	4 v. a
der míh so sére múote,	3 wv. b
gelóubet stát der grúone wált ;	4 v. a
des fróuet síh min gemúote.	3 wv. b
nieman chán nu wérden ált !	4 v. a
vróude hán ih mánichuált	4 v. a
von éines wíbes gúote.	3 wv. b

きびしい冬が過ぎ去った，
私をひどくいためつけた冬が。
みどりの森は讃えられている。
私の心はこれを喜ぶ。

今や誰も老いるわけにはいかない。
私はあの女の親切から幾重にも喜びを得た。

137a, 138a, 139a は形式やモチーフ，表現法において同種の歌である。冬に対する嫌悪，夏（五月）に対する喜びはこの一連の詩のモチーフである。あらゆるものの五月における躍動の喜びは，いかにもドイツ的な歌と言わざるを得ない。

140a.

Nu súln wir álle fróude hán,	4	v. a
die zít mit sánge wól begán!	4	v. a
wir séhen blúomen stán,	3	v. a
div héide ist wúnnechclích getán.	4	v. a
tánzen, réien, spríngerwír		
mit fróude v́nde óuch mit schálle!	4+4wv.	b
daz zímet gúoten chínden áls iz sól;		
nu schínphen mít dem bálle!	5+3wv.	b
min vrówe ist gánzer túgende vól;		
ih wéiz, wiez iv geuálle.	4+4wv.	b

さあみんなで楽しもう，
この時を歌で祝おう。
花々は咲きみだれている。
野は美しい。
踊ろう，輪を作って踊ろう，跳びはねよう，喜び奏でて。
それは良い乙女たちにふさわしい。さあ，まりで遊ぼう。
私の貴婦人はうるわしさで一杯です。私は知っています，私があなたにいかに好かれているかを。

3行目だけ3拍であり，一語の欠落が推定されている。事実 MSH (Fr. H. von der Hagen, Minnesinger) では bluomen の前に liehte が，Schr. (J. Schreiber, Die Vagantenstrophe der mlat. Dichtung und das Verhältnis derselben zu mhd. Strophenformen) では同じく schoene が，LD (Bartsch, Deutsche Liedesdichter des 12-14

Jhd.) では blnomen の次に schône が記されている。春の躍動の中に恋の喜びが折りなされている。

141a.

Div héide grúonet ývnde der wált.	4	v. a
stólze méide, wésent pált!	4	v. a
die vólgele síngent manichuált,	4	v. a
zergángen ist der wínder chált.	4	v. a

野と森はみどり。
気高い娘さんたちよ，元気でありなさい。
鳥はさまざまに歌っている。
きびしい冬は過ぎ去った。

142a.

Ih sólde éines mórgenes gán	4	v. a
éine wíse bréite;	3	wv. b
do sáh ih éine máget stán,	4	v. a
div grúozte míh beréite.	3	wv. b
si spráh: „líebe, wár wend ír?	4	v. c
dúrfent ír geléite?“	3	wv. b
gégen den fúozen néig ih ír,	4	v. c
gnáde ih ír des séite.	3	wv. b

ある朝私は広々とした野を
歩くことになった。
すると一人の娘が立っているのが見えた。
その娘はすぐさま私に挨拶をして，
言った，「殿，あなたはどこへ行かれるのですか？
お伴をしましょうか？」
私はこの娘に深く頭を下げて，
礼を言った。

幻想的な美しさがにじみでている宮廷風の上品な詩である。

143a.

„Ze níwen vróuden stát min múot　4　v. a
hóhe,“ spráh ein schóne wíp.　4　v. b
„ein rítter mínen wíllen túot;　4　v. a
der hát geliebet mír den líp.　4　v. b
ich wíl im íemmer hólder sín　4　v. c
dánne dehéinem máge mín;　4　v. c
ih erzéige ime wíbes tríwe schín.“　4　v. c

「私の心は新しい喜びに高まっています」
ある美しい婦人は言った,
「一人の騎士殿が私の想をくんでくださっています。
あのお方は私を愛してくださいました。
私はいつまでも私の縁者よりもあのお方を愛しましょう。
私はあのお方に女の誠を表わしましょう」

この詩はE写本(die Würzburger Liederhandschrift)にはReinmar von Hagenau (1160〜1205) の作として入れられている。

144a.

Ich hán geséhen, daz mír in dem hérzen sánfte túot:
6　v. a
des grúonen lóvbes pín ih wórden wólgemúot;　6　v. a
div héide wúnnechlíchen stát;　4　v. b
mír ist líep, daz si álso uil der schónen blúomen hát.
6　v. b

私は見た, 心を楽しませてくれるものを。
緑の木の葉に心よくなった。
野は美しく輝いている。
野に美しい花々が咲きみだれているのはうれしい。

145a.

Uvére div wérlt álle mín　4　v. a
vón deme mére únze án den Rín,　5　v. a

des wólt ih míh dárben,　3 wv. b
daz chúnich.....von Éngellánt lége an mínem árme!
6 wv. b

世界がすべて海からラインまで
私のものとなっても,
私はそれをあきらめよう,
イギリスの王が私の腕に抱かれるならば。

B写本では chunich の上に横線が引かれ, その上に小さく diu chuenegin と記されている。 chunich ではあまりにも大胆で, こっけいすぎるので, かように書き改めたのかもしれない。 S. Singer : Studien zur den Minnesänger, in》 Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur (以下 PBB と略す) Bd. 44, 1920, S. 426f. 《によれば, Künegin von Engellant は Eleonore V. Poitou (1122-1204) とされ, chunich von Engellant はキリストとされている。 しかし宗教的に, つまり神の愛を全身全霊で享受すると解釈するよりも, 全体からみて, Vaganten 的に諧謔性を醸しだすためと解釈する方が妥当に思われる。又 Rudolf Palgen : MF. 3, 7, in》 PBB 46, 1922, S. 301-309 《はこの詩は古代フランスの冒険小説が原型であると仮定している。

146a.

Náhtegel, síng eínen dón mit sínne　5 wv. a
míner hóhgemúoten chúnigínne!　5 wv. a
chúnde ir, dáz min stéter múot　v̊nde min hérze brínne
7 wv. a
náh irm súozen libe v̊nde náh ir mínne!　5 wv. a

小夜啼鳥よ, わたしの気高き女王に,
うまく歌を歌っておくれ,
伝えておくれ, わたしのかわらぬ気持と心が
うるわしき身と愛を求めて燃えたっていることを。

小夜鳥は愛の使者である。この詩は Heinrich von Stretelingen の次の詩の模倣であるといわれている。

Nahtegal, guot vogellin,
miner frouwen solt du singen in ir ore dar,
Sit si hat daz herze min
und ich ane fröide und ane hochgemüete var...

小夜啼鳥よ，良い小鳥よ，
私の貴婦人の耳に歌を歌っておくれ。
あの人が私の心を奪ってしまって，
私は喜びも，活気もなくしているがために。

147a.

Ságe, daz íh dirs íemmer lóne :	4 wv. a
hást du dén uil líeben man geséhen ?	4 wv. b
íst iz wár, lébet ér so schóne,	5 wv. a
áls si ságent v̄nde íh dih hóre íehen ?	6 wv. b
„vrówe, ih sáh in:ér ist vró ;	4 v. c
sin hérze stát, ob ír gebíetet, íemmer hó."	6 v. c

言いなさい，私がいつもお前にほうびをやっていることを。
お前は私のいとしい殿御に会いましたか。
皆が言っているように，そしておまえが言っているように，
あの方が立派に暮しておられるとは本当ですか。
「奥様，私はあのお方にお会いしました。あのお方は喜んでおいでです。
あなたがお命じになる時には，いつでもあのお方の心は高まっています」

貴婦人と Bote(in) のWechsellied で，宮廷風のミンネを歌っている。C写本では Reinmar の歌として入れられてある。

148a.

1. Nú sin stólz vnde hóvisch,	3 v. a

nú sin stólz vnde hóuisch,	3	v. a
nú sin hóuisch vnde stólz!	3	v. a
2. Vénus schívzet íren bólz,	4	v. a
Úenus schívzet írn bólz,	4	v. a
Úenus schívzet irn bólz!	4	v. a

1. さあ，誇りたかく，みやびでありなさい。
さあ，誇りたかく，みやびでありなさい。
さあ，みやびで，誇りたかくありなさい。
2. ヴェーヌスはおのが矢を射る。
ヴェーヌスはおのが矢を射る。
ヴェーヌスはおのが矢を射る。

矢を射って，恋の炎を燃えあげらせるのは，ギリシャ，ローマ神話ではエロース（クピード）の役目である。エロースはヴィーナスの子であり，中世において同じように扱われるようになったと思われる。Wolfram von Eschenbach の Parzival 532 にアモールとクピードと二人の母ヴェースが矢に火をつけて射り，ミンネをよび起す，と書かれている。この詩はいかにも Vaganten 的な単純な詩である。

149

I. Flóret sílva nóbilìs		a
flóribus et fóliìs.		a
úbi ést antíquùs		b
méus ámicùs?		b
hínc eqúitávìt!		c
éia! qúis me ámabìt?		c
Refl. Flóret sílva úndiquè;		d
nah míme geséllen íst mir wé!		d
II. Grúonet der wált állenthálben.	4wv.	a
wa íst min geséllе álso lánge?	4wv.	b
der íst geríten hínnen.	3wv.	c
owí! wer sól mich mínnen?	3wv.	c

Ⅰ．森はみごとに輝いています，
花々と葉にみちて。
私の昔の友は
どこにいるのでしょうか。
あの人はここから馬を駆っていかれました。
ああ，誰がわたしを愛してくださるのでしょうか。
森はいたるところ輝いています。
愛する友を想うと心が痛みます。

Ⅱ．森はいたるところ緑に輝いています。
愛する友はどこにこんなに長くいっていらっしゃるんでしょうか。
あの人はここから馬を駆っていかれました。
ああ，誰がわたしを愛してくださるんでしょうか。

ラテン語とドイツ語の混合詩である。ドイツ語の方が，ラテン語の部分より古い。silva nobilis, antiquus amicus のドイツ語詩に対応している語が欠如していることからみて，ラテン語の部分を作るさいに付加したと推定される。

遠くに去った恋人を想う娘の嘆きの歌であるが，暗い悲しみはなく，かえって中世的な素朴で明るい気分がにじみでている。

150a.

Ích pin chéiser áne chróne	4wv. a
ýnde áne lánt : daz méine íh an dem múot ;	6 v. b
érn gestúont mir níe so schóne.	4wv. a
wól ir líebe, dív mir sánfte túot !	5 v. b
daz máchet mír ein vrówe gúot.	4 v. b
ih wíl ir díenen íemmer mér ;	
íh engesáh nie wíp so wól gemúot.	4+5v. b

私は王冠も国も持たない王。
そう私は心にえがいている。
心はこんなにいい気持になったことはなかった。

私の心を楽しませてくれるあの人の愛に幸いあれ。
立派な貴婦人が私にそうさせてくれる。
私はいつまでもあの人に仕えたい。
私はこのような立派な貴婦人にあったことはなかった。

この詩はC写本に Heinrich von Morungen の作として入れられてある。ミンネを国王の地位に匹敵させているのはハインリッヒ4世の詩にもみられる。それほどミンネは魅力のあるものである。

151a.

So wól dir, méie, wíe du scheídest	4wv. a
állez áne ház!	3 v. b
wíe wol dú die bóvme cleídest	4wv. a
v̊nde die héide báz!	3 v. b
(dív hat várue mé.)	3 v. c
„dú bist chúrzer, íh pin lánger!“	4wv. d
álso strítent si úf dem ánger,	4wv. d
blúomen v̊nde chlé.	3 v. c

五月よ，汝に幸いあれ，何とお前は
すべてを愛で仲なおりさせることか。
何とお前は木々と野を
みごとに装わせることか。
（野は一層色どりを増している）
「お前の方が短い，おれの方が長い」
こう花々とクローバは
野で言い争っている。

A写本には Leutold von Seven の作として，C写本には Walther von der Vogelweide の作として入れられてある。巧に擬人法を使用した宮廷風の上品な詩である。野の平和な雰囲気の中に，自然をを支配する神の顕在が暗示されている。

152a.

Ích gesách den súmer níe,　　daz ér so schóne dúhte mich :　　4+4v. a
mit ménigen blúomen wólgetán　　div héide hát gezíeret síh.　　4+4v. a
sánges íst der wált so vól ;　　4v. b
div zít div túot den chléinen vólgelen wól.　　5v. b

こんなに美しいと思える夏を私は見たことがなかった。
野はたくさんのすばらしい花々で飾られている。
森は歌声で一杯だ。
夏は小鳥たちを楽しませる季節だ。

ここで一応春（夏，五月）を喜ぶ歌は終っている。

153a.

Vrówe, ih pín dir úndertán ;　　4 v. a
dés la mích geníezen !　　3wv. b
ih díene dír, so ih béste chán ;　　4 v. a
dés wil díh verdríezen.　　3wv. b
nu wíl du míne sínne　　3wv. c
mit díme gewálte sliézen.　　3wv. d
nu wóldih díner mínne　　3wv. c
vil súoze wúnne níezen.　　3wv. d
vil réine wip,　　2 v. e
din schóner líp　　2 v. e
wil míh ze sére schíezen !　　3wv. d
uz díme gebót　　2 v. x
ih nímmer chúme,　　2 v. x
obz álle wíbe híezen !　　3wv. d

貴婦人よ，私はあなたのものです。
それの報いを与えて下さい。
私はできるかぎりあなたに尽くしています。

でもあなたは御不満のようですね。
今やあなたは無理やりに
私の心を閉じこめてしまわれます。
今や私はあなたの愛の
甘美な喜びを味わいたいのです。
いと美しき御婦人よ,
あなたの美しい身は
私を射って痛ませます。
たとえどんな御婦人が命じても
私はあなたの御命令以外には
決して聞くことはありません。

Liebesklage を歌っている。din schoner lip wil mih ze sere schiezen は誇張的な表現である。

155a.

Sí ist schóener dén urówe Dído wás,	6 v. a
sí ist schóener dénne vrówe Hélená,	6 v. b
sí ist schóener dénne vrówe Pállás,	6 v. a
sí ist schóener dénne vrówe Écubá ;	6 v. b
sí ist mínnechlícher dénne vrówe Ísabél	7 v. c
únde urólícher dénne Gáudíle ;	6wv. d
mínes hércen chlé	3 v. c
ist túgende rícher dénne Báldíne.	6wv. d

あの人はディードーよりも美しい。
あの人はヘーレナよりも美しい。
あの人はパラスよりも美しい。
あの人はエクバーよりも美しい。
あの人はイサベルよりもうるわしく,
ガウディレよりも陽気だ。
私の心のクローバは
バルディネよりも徳高い。

いかにも Vaganten の作らしい, 単調な繰返の歌である。Dido, Helena, Pallas, Ecuba は周知の人物であるが, Isabel, Gaudile,

Baldine は不明である。Vaganten が勝手に創作したのかもしれない。mines hercen chle は Grimm の Deutsches Wörterbuch によれば恋人自身の事を指す。

161a.

Div wérlt frývt sih úber ál	4 v. a
gégen der súmerzíte :	3wv. b
áller sláhte úogel schál	4 v. a
hóret mán nu wíte,	3wv. b
dár zuo blúomen v̊nde chlé	4 v. c
hát div héide víl als é,	4 v. c
grv̊one stát der schóne wált ;	4 v. d
dés suln wír nu wésen bált !	4 v. d

どこもかしこもいきとしいけるものは
夏を喜んでいる。
今やあらゆる鳥のさえずりが
かなたに聞える。
その上前と変らず野は
たくさんの花々とクローバで一杯だ。
美しい森は緑。
だからさあ陽気になろう。

162a.

Sv̊oziv vrówe mín,	3 v. a
lá mih dés geníezen :	3wv. b
du bíst min óvgenschín.	3 v. a
Vénus wíl mih schíezen !	3wv. b
nu lá mih, chúnigínne, díner mínne níezen !	3wv. +3wv. b
ía nemág mih nímmer dín uerdríezen.	5wv. b

私の愛する貴婦人よ。

私を楽しませて下さい。
あなたは私のまなこです。
ヴェーヌスが私を射ろうとしています。
女王様，あなたの愛を味わせて下さい。
決して私の愛は変ることありません。

161a はまた夏を謳歌する歌，162a はミンネの苦しみと楽しみを，歌っている。